

日本人の持つ宗教観

—日本人は「無宗教」なのか—

外国语学部 国際文化交流学科 3年

和田 素

はじめに

日本人には自らの宗教について尋ねられた際に「無宗教」であると答える人が多い。論文作成にあたり、FacebookとTwitterで友人、フォロワーに「無宗教であるかに」について尋ねた際、全体の約半数以上の人人が「無宗教である」と回答をした。また、ロイター通信の記事によれば日本の人口の約半数、7200万人が「無宗教」なのであるという⁽¹⁾。私自身も以前、海外で外国人の友人にどの宗教を信仰しているか尋ねられた際には何の疑いも持たずに「無宗教」だと答え、同時に日本人の多くも「無宗教」であると付け加えた。

しかし、私たち日本人は正月には初詣にいき、知人が亡くなればお葬式で故人が「ホトケ」となり「成仏」することを願う。中学時代には母校の創立者の命日には遺影の前でお焼香をあげ手を合わせたし、お盆には墓参りに出向き故人となった先祖に対して手を合わせる。

神や仏の存在を日常的に感じるかどうかについて調査した朝日新聞社の記事がある。この記事によると、調査対象者の内75%が「神頼み」をするのにも関わらず、神仏の存在を信じていると答えた人は58%にとどまった。さらに、宗教を信仰していると答えた人はわずか16%であった⁽²⁾。また、國學院大學の教授が行った調査では日本人で何かしらの信仰を持っている割合は3割を切っている⁽³⁾。この調査結果から分かるように、私たちは日常的に「神」や「仏」を対象に祈るという行為を行っているのであるにも関わらず、宗教を信仰していない「無宗教」であると標榜しているのである。「神頼み」や祖先に手を合わせるという行為は外国の宗教信者からすればこれらの行為は立派な宗教行為となる。彼らからすれば、そのような行為を行

う日本人が自らを「無宗教だ」と言うことは奇異であるのだという。また、日本国内における宗教信者数は1億9710万835人と、人口を優に超え2億人に迫る勢いである⁽⁴⁾。さらに、日本国内における寺社の数は寺院が82,145、神社が86,459の合計168,606軒⁽⁵⁾となり、これは日本国内におけるコンビニエンスストアの店舗数の約3倍にものぼる⁽⁶⁾。これほど日常的に神仏に手を合わせ、多くの寺社・宗教信者数を抱える国に住む日本人は本当に自らのことを「無宗教」であると標榜し続けてもよいのだろうか。

本論文では、日本人は「無宗教」ではないと主張する禅僧であるネルケ無方、日本思想史学者の阿満利麿、日本人は「無宗教」であると主張する宮司の片山文彦によってそれぞれ書かれた3冊の文献を読み、それぞれの著者の主張を比較して考察し、日本人は無宗教なのかという問い合わせに対する答えを導き出していきたい。

1. 創唱宗教と自然宗教

本論文において日本人の宗教心について論ずるにあたり、宗教を「創唱宗教」と「自然宗教」の二つにわけて論じていきたい。

阿満によれば、創唱宗教とは、特定の人物が特定の教義を唱えてそれを信じる人々がいる宗教のことであり、教祖と経典、教団によって成立している。具体的には、キリスト教やイスラム教、仏教、新興宗教などが挙げられる。これに対して「自然宗教」とは、発生が自然的で前者のような教祖や教団を持たず、先祖たちによって無意識に受け継がれてきた宗教のことを指す（阿満、p11）。

これに関して阿満は多くの人々が初詣に足を運ぶ理由を例に挙げ、以下のように述べている。

どうしてこのように多くの人々が初詣に出かけるのか。それこそ、日本人の多くが「自然宗教」の「信者」である証拠なのである。「自然宗教」という言葉になじみがないからだれも自分たちが「信者」であるとは思ってもみないが、私の宗教の定義からすれば、初詣をする人はれっきとした「自然宗教」の「信者」ということになる。(阿満、p11)

創唱宗教と自然宗教、この2つの宗教の違いを把握した上で、「日本人は無宗教であるか」について考えていきたいと思う。

2. 日本人にとっての「宗教を持つ」とは

曹洞宗の禅僧であるネルケは、日本人にとっての宗教とは「空気を吸って吐くように自然な」無意識に行う生理現象と同じであり、宗教心がありふれているからこそ日本人は自らのことを無宗教であると標榜することに躊躇いを感じないと主張している(ネルケ、p.22)。日本人にとっての宗教とはその存在を意識せざとも身に付いているものであり、神社参りやお葬式などを行うことは宗教的行為ではなく慣習であるという認識をしていくことから、「空気を吸って吐くように自然」に持っているものであるというのだ。

それに対し、宮司の片山は宗教を持つということは「自らの意思を以って持つ」ものであると述べている。宗教を持つには何らかの大きなきっかけが必要であり、そのきっかけとは民族の存在を脅かすほどの他民族による蹂躪のような絶望を味わう経験なのであるのだという。そのような絶望を経験した際に、その絶望から立ち上がる為の「杖」としての宗教が存在し、その「杖」を頼りに生きていくことこそが「宗教を持つ」ということなのであるという(片山、p.6)。また、日本人は生まれながらにして宗教の「杖」の中に存在しており、その「杖」には自らの意思を以って入っていないことから日本人は無宗教であると論じている。この場合における「杖」とは、日本人が先祖代々受け継いできた信仰のことであり、先述したネルケの言う「空気を吸って吐くように自然な」、及び阿

満の「自然宗教」のような無意識に持つ宗教のことと指していると考えられる。

日本人が持つ宗教心とは「空気を吸って吐くように自然」なものであるとするネルケ、そして宗教を持つということは「自らの意思を以って持つものである」という片山の主張から、「宗教を持つ」ということにはいわゆる「創唱宗教」の「自らの意思を以って持つもの」と「自然宗教」である「無意識の内に持つもの」の二つが存在していると考えることが出来る。そして、無宗教を名乗る日本人にとっての「宗教を持つ」ということは「創唱宗教を持つ」ということになり、「自然宗教」は「宗教」の対象になっていないのであると考えることが出来るだろう。

自然宗教の内容に関しても朝日新聞社が行った調査が参考になる。この調査においては、幸せに感謝するときや自然の美しさや神秘を感じたとき、支えがほしいときに人々は神仏の存在を意識するとしている。また、葬式や法事における靈魂に対する宗教的儀礼は仏教信者であらずとも習慣的に行っている⁽⁷⁾。では、なぜ日本人はこのような「自然宗教」を「宗教」であると認識せず、自らを「無宗教だ」と標榜しているのだろうか。それには、明治時代の維新政府による政策による影響が大きいとみられる。

3. 明治維新政府による影響

前章では日本人が「宗教を持つ」ということの意味について考え、そこには二つの種類があるとした。また、日本人の考える「宗教」とは本来日本人が持っている宗教である「自然宗教」ではなく「創唱宗教」であり、「自然宗教」を「宗教」として認識していないのには明治維新政府による政策の影響が大きいとした。では、その政策とはどのようなものだったのだろうか。

阿満によると、当時、列強諸国との外交を確立しようとした維新政府にとって、徳川幕府から引き継いだ「キリストン禁制」は大きな障害となっていた。維新政府は対外的には「キリストン禁制」の高札を撤去することでキリスト教の信仰や布教が自由化されたかのように説明し、国内に対して

は「キリストン禁制」が当たり前となっていることから高札を撤去したのだと相反する説明を行った。しかし、その主張を突き通すことも難しくなり、維新政府はキリスト教や仏教などを一括して表現する言葉を必要とし、それが「宗教」という言葉になったのだ。つまり、この時に「宗教」として括られたのはいわゆる「創唱宗教」であり、「自然宗教」は対象ではなかったのだ。日本人が「無宗教」を標榜するのも、このような歴史的な経緯があつてのことであろう（阿満，p.74-75）。

ここで、なぜ維新政府はそれらの「宗教」を一括りにする必要があったのかという疑問が湧いてくる。それはおそらく、当時推進していた天皇を崇拜する国家神道の国民への普及を「宗教」によって阻害されるのを防ぐために、それら「宗教」を規制する為に造られたのではないかと考えられる。これまでにも述べてきたように、日本人が本来信仰している宗教は「空気を吸って吐くように自然」な宗教であり、その宗教の「枠」の中にいた日本人は自らが宗教を信仰しているなどということは思いもしていなかっただろう。そんな所に外来思想であるキリスト教などの「宗教」がやって来て自由に布教活動、宗教活動を行わせてしまうことは、何も育っていない畑に野菜の種をばら撒くのと同じことである。「宗教」がたちまち国民に拡散し、維新政府の掲げる国家神道の浸透は失敗に終わることは容易に想像できたであろう。しかし、国家神道の狙いは列強諸国と遜色のない強い国民国家の形成であり、列強諸国をモデルとしていたのであるからキリスト教であっても国家神道であっても強い国家を作り上げるという目標は達成することが出来たのではなかったのだろうか。むしろ、列強諸国の手でキリスト教を国内に布教することの方が、国民国家を形成するよりも手早い手段ではなかったのではないかとも考えることが出来るのではないだろうか。この疑問について考える為に、次の章では天皇崇拜（国家神道）について考えてみたい。

4. 天皇崇拜（国家神道）と神道非宗教論

ネルケは日本でキリスト教が今なおあまり普及

していない理由について「日本人には天皇というキリスト教以上の存在があったからだ」（ネルケ，p.148）としている。キリスト教の布教を阻むほどの力を持った「天皇」を信仰対象とする国家神道とはどの様なものなのだろうか。

前章で記したように、維新政府は天皇を日本人の信仰対象とする国家神道生み出すことで、列強諸国に劣らない国民国家の形成を目指んだ。阿満は天皇の役割について、「天皇を中心とする、強固な中央集権国家」（阿満，p.82）を目指すこととし、その理論は「アマテラスの子孫である天皇が先祖を祀ることで、人民もそれぞれの祖先祭祀に励むようになり、神話時代に、祖先たちが天皇の恩恵を受けて暮らしていたことや天皇に忠誠を尽くしてきたことを思い起こして、新しい国家づくりに積極的に参加するようになる」（阿満，p.84）ことであったとしている。それこそが天皇の存在意義であり、それまで存在を忘れられていた天皇をいわば国造りの道具として利用したと言っても過言ではない施策をとった。そして、天皇を神聖視することを国民に徹底させた。しかし、当時列強諸国との外交を確立することに躍起になっていた維新政府は対外的には「信教の自由」を示していた為、天皇を神聖視する国家神道を宗教であるとするることは出来なかった。そこで登場した維新政府の神道非宗教論は、「朝憲」と「教憲」という考え方を基盤にしたものであった。前者は国民が守るべきである国家としての掲げ、後者はいわゆる「宗教」を意味し、言うまでもなく維新政府は国家神道は前者であるとしたのである。そうすることで国家神道は「宗教」ではなくなり、「信教の自由」には抵触しないということになった（阿満，p.93）。

ここで、これから論を展開する前に「国家神道」と「原初神道」の違いを述べておきたい。「国家神道」が国造りのために維新政府によって作り出されたものであるのに対し、「原初神道」は古来より日本で信仰されてきた「自然宗教」なのである。

維新政府は「国家神道」を「朝憲」として「宗教」ではないと定義したが、天皇という信仰対象を持ち、国民に天皇を神聖視させた「国家神道」が「宗教」ではないとすることには違和感を持つ。宗教を「自然宗教」と「創唱宗教」の二つを用いて考

えるのであれば、この場合の「国家神道」は十分に「創唱宗教」であると言えるだろう。「国家神道」は「空気を吸って吐くように自然な」ものでもなければ、「無意識の内に持つもの」であるとも言えず、むしろ新しい国家を作り上げる為の「杖」として開発されたものであり、当時の人々は維新政府による「布教」によって国家神道を受容したのではないだろうか。

神道非宗教論を唱えたもう一つの組織が浄土真宗である。阿満は、浄土真宗の教えには「真俗二諦」と呼ばれるものがあると言う。それは「真諦」と「俗諦」の二つの合わさった教えであり、前者は阿弥陀仏の本願を信じて念佛する者は必ず（極楽）淨土に生まれて仏になるというものであり、後者は浄土真宗の信者が守るべき現世の決まりで、世間の支配者に従い、秩序を守り、道徳を尊守して生きよという教えである。

しかし、「俗諦」を守ってしまえば「国家神道」への信仰を促す維新政府の方針に従うこととなるのに加え、神々を拝まない「神祇不拝」の原則に反することにもなり、阿弥陀仏のみへの信仰を認める浄土真宗にとっては死活問題となる。そこで浄土真宗の僧侶である島地黙雷は以下のように唱えた。

神道は祖先を崇敬する道であり、それは宗教とは言えない。諸神とは、祖先や国家に功労のあった人々を指し、それらの人々を祀るのはその恩徳を忘れないためであり、功労者の偉業に倣うためである。神社への参拝は祖先への敬意を示す行動だ。（阿満, p.95~97）

神道を先祖への感謝を示し、拝むものであって「宗教」ではないとする理論に関しては片山も「先祖を拝み、感謝しようということは人類普遍の認識であり、それをする神道は思想以前である」（片山, p.18）と述べ、島地と同じく神道は宗教ではないとしている。しかし、「自然宗教」の定義について阿満が「広義には開祖、主唱者を特別に立てない信仰、狭義には祖先崇拜中心の民間信仰」だとしている。片山の主張、浄土真宗の「神道非宗教論」双方に共通している神道の定義である「先祖信仰・

崇敬」は阿満の唱える「自然宗教」に当てはまると言えるのではないだろうか。

5. 葬式仏教

ここまで神道を用いて論じてきたが、この章では仏教的な側面から考えてみたいと思う。日本では親族が亡くなれば多くは寺で僧侶に経をあげてもらう仏教式の葬式を行い、また、死後時間がたっても法事や墓参りを行い死者の靈魂を弔う。それは私たちにとってはいわば「当たり前」となっている儀式であり、葬式と法事をしなければ死者が「成仏」せずに安らかに眠ることが出来ないのではないか、と感じるものである。また、自らの宗教について答える際に特定の宗教を信仰していないても「仏教だ」と答えるのには葬式仏教の存在が大きな理由だろう。しかし、この「葬式仏教」を「仏教」とするのには少々無理があるようと思える。

ネルケは仏教について、それは人としてどう生きるかについて説く「生きるための教え」（ネルケ, p.83）であるとしており、片山も「仏教は、生きている人間を対象に、「苦」の人生からの解脱を教える宗教」（片山, p.65）としている。仏教とは苦しみに満ち溢れる世界をいかにして生きていくかを説き、人生のすべてを悟った「覚者」「仏陀」となることを目的にしているのだ。

阿満は「葬式仏教」について「僧侶によって死者に戒名や法名がつけられ、それらは「釈〇〇」と記される。その「釈」とは釈迦の「釈」に由来しており、仏弟子になったことを示す。」（阿満, p.49）と述べている。つまり、葬式によって送り出される故人は釈迦の弟子になることが出来、そうすることで「成仏した」と人々は考え、故人自身も葬式があることで死後に仏弟子となれることから死後の世界への恐れを感じずにいられるのである。また、故人の靈を弔い「成仏」して安らかに眠らせることに加え、阿満は故人を「ご先祖」として永遠に家のメンバーであり続けさせることも葬式の目的だとしている（阿満, p.58）。ご先祖に対して祈りをささげるという葬式で行われる行為は「祖先を崇敬する道」や「先祖を拝み、感謝しようということ」といった先述した神道の掲げる

大目標であり、それと故人を「成仏」させる仏教的な思考を持った葬式が混ざり合っている「葬式仏教」には仏教の元来の教えである「生きるための教え」はないのである。また、阿満も「葬式仏教のどこに覚者を目指す仏教があるのか」と述べ、「仏教」と「葬式仏教」の同一性を否定している（阿満,p.66）。そのことから、葬式や法事を行うからといって「仏教徒」であるとは言えないだろう。

では、なぜ葬式「仏教」と言われるのだろうか。それは、日本人が仏教を受容した歴史に答えがある。

仏教が日本で布教をしようとした際に障害となったのが日本人の持つ「自然宗教」への厚い信仰心であった。「自然宗教」が強く根付いている日本人にとって、新たな外来思想で創唱宗教である仏教を受け入れることに抵抗があったのである。そこで、仏教がとった姿勢について、阿満は次のように述べている。

「葬式仏教」とは、この「自然宗教」との妥協の産物なのである。「自然宗教」の先祖崇拜や靈魂觀をそっくり認めたうえで、仏教的色彩を施したのが「葬式仏教」にほかならない。「葬式仏教」とは、「自然宗教」に仏教の衣を着せたものなのだ。（阿満, p.66）

更に、「葬式仏教」において死者を表す「ホトケ」という言葉については「『ホトケ』とは、伝統的な『カミ』の一種なのである。」(p.64) と述べている。

「葬式仏教」とは、頑なに「創唱宗教」の受容を拒む日本人に仏教を受け入れさせる為に神道としての先祖崇拜を行う「自然宗教」と組み合わせることで日本人にとって受け入れやすく作られたものであり、神仏習合の形の表れの一つであるとみることができるだろう。また、ネルケは日本における仏教について、いまや日本における仏教とは「葬式仏教」になってしまっており、僧侶は葬式や法事の際にしか必要とされていない(p.82) と述べている。先述した通り、本来であれば「生きるための教え」を説くのが仏教の役割であるにも関わらず、人々が僧侶や寺を必要とするのは今や葬式や法事の時ののみであり、普段はほとんど必要とし

ていない。その結果、僧侶の主な仕事が葬式と法事になってしまっているのである。こうなってしまえば、日本における「仏教」はもはやその本来の意味を失っているように見え、「葬式仏教」によって葬式や法事を行い、先祖を祀る日本人は「仏教徒」ではなく「自然宗教」の信者であると言える。

6. 終わりに

日本人の多くは自らの信仰する宗教について尋ねられた際に「無宗教」であると言うことに抵抗を持たない。事実、私自身も大学に入学して日本思想の授業を受けるまでは自らを「無宗教」であると信じて疑っていなかった。しかし、古来より現在に至るまで日本人の心の奥底に活き、受け継がれ、日本文化を形成する大きな要因となってきた「自然宗教」、そこから派生し市民生活に受容された、死後の世界の保証を求める「葬式仏教」を日本人は信じているのである。それらを「宗教」とすると意識せずとも「習慣」として日常的に行っている日本人のことを「無宗教」であると言い張ることは出来ないのでないだろうか。

一般的な日本人の捉える「宗教」はいわゆる「創唱宗教」であり、「自然宗教」は「宗教」として捉えられていないのである。本論文では日本における宗教を歴史的、宗教学的側面から述べたが、「自然宗教」を「宗教」として捉えない日本人の一般論、感情や感覚の側面から見れば日本人は「無宗教である」と答えなければならないであろう。しかし、現実には日本人は「自然宗教」という「宗教」の信者なのであり、決して「無宗教」ではないのである。

先祖代々受け継いできた宗教心を知らずして何の躊躇もなく「無宗教だ」と答えることは、自らの存在や日本という国について知らないということと同じではないだろうか。

世界はグローバル化が進み、今後私たちはますます多くの外国人と接する機会があるだろう。外国文化に興味を持ち、留学を志す学生も多くいる。しかし、自らの国の文化を作り上げる上で非常に大きな要因になっている宗教について知らずして

外国人と接すれば知識の欠如によって恥をかくことになりかねない。外国文化を学ぶ前にまずは自國の文化を形成する大きな要因となっている宗教について知るべきではないだろうか。自らの思想、文化、信条を作り上げている「宗教」という存在をもっと身近なものとし、その本質を捉えること。日本人を名乗って生きていくならば、知っておくべき教養なのではないだろうか。

註

- (1) ロイター通信. 「「無宗教」が世界の第3勢力、日本では人口の半数占める=調査」,
<http://jp.reuters.com/article/oddlyEnoughNews/idJPTYE8BI02P20121219>

調査機関ピュー・リサーチ・センターが行った世界の宗教動向調査によると、無宗教はキリスト教、イスラム教に続き3番目に人口が多い人口（11億人）を持っていると分かった。その内の6割以上が中国に住んでおり、日本は人口の半数以上に当たる約7200万人が無宗教で、中国の次に多かった。ただ、無宗教とされる人たちの多くが何らかの精神的な信仰を持っていることも指摘されている。

(2) 朝日新聞朝刊 2015年6月20日

(3) 石井研二. 世論調査による日本人の宗教性の調査研究. 國學院大學神道文化学部. 平成23年3月

國學院大學神道文化学部の石井研二教授が1999年から2009年まで行った「信仰の有無」についての調査で「信仰あり」と答えた人は常に3割を切っている。

(4) 文化庁. “宗教年鑑 平成24度版”

<http://www.bunka.go.jp/shukyouhoujin/nenkan/pdf/h24nenkan.pdf>
 神社の氏子と寺の檀家が重複して数えられているため、全国民数よりも多い数字となっている。

(5) 注(4)に同じ

<http://www.bunka.go.jp/shukyouhoujin/nenkan/pdf/h24nenkan.pdf>

(6) 一般社団法人 日本フランチャイズチェーン協会. “コンビニエンスストア統計調査月報 2014年11月度”

<http://www.ifa-fc.or.jp/folder/1/img/20141222121042.pdf>

(7) 注(2)に同じ

参考文献

- ネルケ無方『日本人に「宗教」は要らない』ベスト新書、2014年2月
 片山文彦『日本人はなぜ無宗教でいられるのか』原書房、2006年9月
 阿満利麿『日本人はなぜ無宗教なのか』ちくま新書、1996年10月